

第4章 教育内容・方法・成果

(3) 教育方法

【大谷大学短期大学部】

1、現状の説明

(1)教育方法及び学習指導を適切に行っているか。

【短期大学全体】

短期大学部は学則第1条、「大谷大学短期大学部 短期大学士課程の教育方針」に基づき教育研究を行っている（資料4(3)-1「大谷大学短期大学部学則」、資料、4(3)-2 本学 HP「大谷大学短期大学部 短期大学士課程の教育方針」）。また、セメスター制を採用し、前期・後期それぞれ試験期間を除いた授業期間が各曜日15回確保できるように学年暦を定めている。「学年暦」は開講する前年度に教授会で審議・決定する（資料4(3)-3『履修要項2014』表紙裏）。

カリキュラムに示した3つの科目群（共通科目、学科科目、自由科目）の授業は、科目の目標に応じて、講義、演習、実習の形態をとっている。それぞれ、「大谷大学短期大学部 仏教科 短期大学士課程の教育方針」、「大谷大学短期大学部 幼児教育保育科 短期大学士課程の教育方針」に明示し、『履修要項』で学生に周知している（資料4(3)-3 pp.14-15）。

履修単位数については、単位の実質化を図るために前期、後期、及び年間で登録できる単位数の上限を48単位までとしている。これらは、「大谷大学短期大学部履修規程」に定めて『履修要項』に明示し、学生に周知している（資料4(3)-4「大谷大学短期大学部履修規程」、資料4(3)-3 p.38）。カリキュラムは、共通科目(4～6単位)、学科科目(50～56単位)、自由科目(2～6単位)で、卒業までに必要な単位は合計62単位となる。

履修登録についての指導は、新入生オリエンテーションにおいて「履修登録説明会」「クラス別懇談会」等を実施している。1年を2期に分けて、期ごとに科目を完結させて単位を認定するセメスター制を導入していること、2期に分けることによってより多くの科目が選択でき、短期間に集中して学修し、無理なく履修計画が立てられるといった利点について説明している。そして、2年間を通じてバランスよく学修を積み上げられるよう、第1学年時の必修科目を記載した時間割表を提示し、履修指導を行っている。指導教員は個々の学生が作成した時間割表により、履修状況を把握し、適切なアドバイスを行っている。

教員が学生の状況について把握できるようオフィスアワーを設定したり、各学年でグループ面談や個別面談を実施したりするなど、学生とのコミュニケーションを図っている。

学生の授業への主体的参加を促すために、「大谷大学短期大学部 短期大学士課程の教育方針」に卒業時に身につけておくべき6つの能力を明示するとともに、シラバスにおいて15回分の授業内容や「自主学習」と項目をあげて予習・復習の内容や方法について示している（資料4(3)-2、資料4(3)-5『授業計画（シラバス）2014』）。教員は、学生にシラバスの内容に事前に目を通したうえで授業に臨むよう働きかけるとともに、それぞれの授業において学生の主体的参加を促せるよう工夫を行っている。

【仏教科】

授業形態、履修登録科目の上限並びに学習指導については、上記のとおりである。学生の授業への主体的参加を促すための本学科の取組は次のとおりである。

○フィールドワークを取り入れた授業

仏教科における2年間の学びの特徴は「体験」と「対話」を重視していることである。例えば、比叡山や京都に点在する親鸞ゆかりの地を巡る体験学習「親鸞を歩く（京都フィー

第4章 教育内容・方法・成果

(3) 教育方法

【大谷大学短期大学部】

ルドワーク)」、釈尊の軌跡や異文化を体験する「ブッダを歩く(インドフィールドワーク)」等、実際に見て感じる学びを行うことにより、主体的、積極的な参加姿勢を育てている。また、仏教や釈尊、親鸞を通し社会の多様な価値観を知ること、「自己発見力」「他者理解力」を身につけられるよう指導を進め、社会性とコミュニケーション能力の基礎を培うことにより、主体的に社会と関わっていける人物の育成に努めている。

○仏教科研究室を拠点とした学習指導

2年間の学びの時間をより濃く、より有意義にするために、第1学年ではゼミ形式で基礎力を養っている。学生が自由に学ぶ機会をもてるよう、常に仏教科研究室を開放し、講義内容の質問から教員との日常的会話まで、学生と教員が近い距離で対話を重ねながら学びを深めている。第2学年の後半には教員や仲間との対話を通して卒業研究を行っている。具体的には、第2学年の6月以降、指導教員(主査)を除く仏教科の関係教員が副指導員(副査)となり、卒業研究の題目決定・章立てを含む論理構成等の指導、文章の添削、参照すべき参考文献の指示等を行い、最終的に口頭試問における副査を担当する。学生は教員との対話を通して、自身の関心を焦点化し、題目を決定し、定期的に文章の添削指導を受け、卒業研究の提出をめざしている。これらの活動はほぼ全て仏教科研究室において行っている。

○少人数編成による授業

実践仏教演習Ⅰ・Ⅱ、人間とこころ演習Ⅰ・Ⅱにおいては、1クラス10名程度の少人数で指導を行っている。少人数で行うことにより、個々が発表する機会が増え、ディスカッションでの発言も多くなる。そのことが、学習への主体的な姿勢を生み出している。また、教員と学生との結びつきを強め、学生の実態に応じて学習指導を行うことにより、学生が獲得しなければならない力の育成を図っている。

【幼児教育保育科】

授業形態、履修登録科目の上限並びに学習指導については、【短期大学全体】に記述したとおりである。加えて、本学科の学習指導のために実習支援センターを置いている。実習支援センターにおいては、幼児教育保育科の幼稚園教諭・保育士をめざす学生に対して、資格取得にかかる実習に対する支援や履修指導を行っている。

学生の授業への主体的参加を促すための本学科の取組は次のとおりである。

○実践的な学びができる参加型・体験型授業

第1学年の「実習指導」では、実際に幼稚園や保育所で子どもたちと関わり、保育者の仕事を知ることが目的とした園見学を行っている。自ら体験することで、実習への具体的なイメージを描くとともに、今後の課題について考える機会となっている。

第2学年の「保育・教職実践演習(幼)」では、幼児教育・保育における教育課程や保育課程の意義について再確認し、保育指導案や保育計画等の作成を行っている。現場において即戦力となる実践力を身につけ、学生の自信にもつながるよう指導している。また、「保育内容・総合表現」では、2年間の学びをふまえた総合的な表現活動として、舞台発表の企画・制作に取り組んでいる(クラス毎にテーマを設定し「幼教フェスティバル」で発表)。学生の主体的な活動を促し、保育現場での実践力につながるよう、技術面やチームワークを高めるための助言を行っている。

第4章 教育内容・方法・成果

(3) 教育方法

【大谷大学短期大学部】

○少人数編成による授業

第1学年での「学びの発見」や、第2学年での「仏教保育演習」においては、1クラス10名程度で指導を行っている。少人数で行うことにより、ディスカッションでの発言や発表の機会を増やし、自ら考え表現することができる学生の育成に取り組んでいる。卒業研究の作成においても、少人数の利点を生かして、学生と教員が近い距離で対話を重ねながら進めていくことで、主体的な取組を促している。また、ピアノレッスンでは、初心者から経験者までの幅広い層への対応として少人数グループを組み、個々の力量に応じた指導を行うことにより、個々の課題と目標を明確にして学ぶ意欲につなげている。このように、教員は、学生の実態に応じた指導助言を行い、獲得しなければならない力の育成に努めている。

○地域と連携した授業の実施

地域の子育て支援活動と連携し、学びの場として「すくすく赤ちゃん広場」の取組を授業に位置づけている。学生は、主体的、積極的に授業に参加する中で、保護者支援という視点から保育士の役割について実践的に学ぶ機会を得ている。

○幼児教育保育科研究室を拠点とした学習指導

幼児教育保育科研究室に専属の事務職員が常時待機し、学習・研究への助言や相談に応じている。授業時間外の学習スペース、また、ミーティングスペースとして学生の居場所となっており、授業の予習や課題制作等、主体的に取り組む姿が見られる。自由に利用できるパソコンや、関係書籍・参考資料等を配置し、研究環境を整え、主体的な活動を支えている。

(2) シラバスに基づいて授業を展開しているか。

【短期大学全体】【仏教科】【幼児教育保育科】

シラバスの記載事項は、「授業テーマ」「授業内容」「教科書」「参考書等」「学習到達目標と授業計画」「自主学習」「成績評価の方法と基準」とし、それらの項目に従い統一した様式の下、学生に提示している（資料4(3)-5）。本学は2006年度からWebシラバスを導入しており、各教員はWebを利用して必要項目を入力している。『授業計画(シラバス)』原稿入力についての依頼文書に添えられたレイアウト見本や「自主学習」の記載内容例を参考にして15回分の授業内容、自主学習内容を入力し、成績評価の方法と基準については各教員の基準により記述している（資料4(3)-6「2014年度『授業計画(シラバス)』原稿の入力について」）。

シラバスに毎回の講義内容や自主学習を明示することにより、学生は予習を行うことができ、成績評価基準や方法等から判断して、計画的に学習を進められるようになっている。シラバスフォーマットの作成により記載項目の書式を統一し、特に留意しなければならない項目については、教員間の記述の精粗が極端にならないよう、サンプルを提示することにより、内容の充実を図っている。このことはシラバス記載に対する教員の意識の向上につながっている。2009年度からは、学生が時間割を作成する際に役立つ機能も取り入れ、履修計画を立てやすくしている。第1学年には冊子でも配付している。

また、授業に関する質問や感想等を短期大学部研究室において学生から直接聞くことにより、改善点が具体的に把握できるため、それらの内容について学科で議論を重ね、次年

第4章 教育内容・方法・成果

(3) 教育方法

【大谷大学短期大学部】

度のシラバス作成の際に授業内容に反映させることにより授業改善を図っている。

シラバスの内容に基づいた授業を展開しているかどうかについては、学生に対する授業アンケートにおいて、「授業がシラバスに基づいて実施されたか」という質問項目が設けられており、アンケート結果を担当教員にフィードバックし、授業改善に役立てられるようになっている(資料 4(3)-7「授業をよりよくするために『学生による授業評価アンケート』実施要項・調査票」)。しかし、授業改善に向けた具体的な取組については個々の教員に任されているのが現状である。また、個々の教員がシラバスに基づいて適切な内容で授業を行ったかどうかという点について、適切に検証を行うことが今後の課題である。

(3)成績評価及び単位認定を適切に行っているか。

【短期大学全体】

成績評価については学則の第21条(学習の評価)に定め、『履修要項』に明示し、学生に周知している(資料 4(3)-1、資料 4(3)-3 p.53)。また、単位認定については学則第17条(単位修得の認定)に定め、『履修要項』に明示し、学生に周知している(資料 4(3)-1、資料 4(3)-3 pp.59-62)。

成績は100点をもって満点とし、60点以上を合格としている。履修成績はS(100点～90点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)、を合格、F(59点以下)を不合格としている。また、授業参加や試験について棄権・放棄をしたとみなされ、評価できないものについてはK(評価不能)としている。各科目における成績評価の方法と基準はシラバスに明示している。また、学業結果を総合的に判断できるよう、GPA制度を導入している。Semesterごとの学修成果と推移を明確にすることにより学生による成績の自己管理と綿密な履修計画の作成、学習意欲の向上を図っている。また、指導教員には受け持っている学生のGPAを配付するため、学生の成績が把握でき、指導に役立てることができる。

本学では、単位については「短期大学設置基準」第7条に基づき、学則第17条において「授業科目を履修し、授業に3分の2以上出席した者には、認定の上、所定の単位を与える」と定めている(資料 4(3)-1)。これを受け、「大谷大学短期大学部履修規程」第4条(単位)の2項においては「単位認定には、全授業の3分の2以上の出席及び当該科目の試験に合格することを必要とする」と示し、第5条においては卒業のための最低履修単位及び学年配当について定めている(資料 4(3)-4)。

単位は、1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする内容(授業時間外に必要な学修時間を含む)をもって構成している。講義と演習については、原則として、15～30時間の授業時間と授業外の学修を合わせた45時間の学修をもって1単位としている。また、外国語、実習・実技については、原則として30～45時間の授業時間と自習時間を合わせた45時間の学修をもって1単位としている。これらの単位設定に基づき、卒業のために2年間で修めるべき科目・単位数・履修学年は「大谷大学短期大学部履修規程」に定め、『履修要項』において「学科別卒業単位配当表」として学生に周知している(資料 4(3)-4、資料 4(3)-3 pp.21-25)。

また、「授業科目の単位の修得」以外の単位認定については、学則第17条の2(入学前の既修単位の認定)(再入学者の入学前の既修単位の認定)、学則第17条の3(他の短期大学又

第4章 教育内容・方法・成果

(3) 教育方法

【大谷大学短期大学部】

は大学における授業科目の履修等)において定めている(資料4(3)-1)。『履修要項』では、在学中に他の大学又は短期大学の授業科目を履修するための具体的な制度について説明し、学生に周知している(資料4(3)-3 pp.18-20、p.45)。例えば、「大谷大学文学部」との単位互換制度、大学コンソーシアム京都「単位互換制度」、「科目等履修生制度」「留学制度」による認定等がそれにあたる。

【仏教科】

各科目における成績評価方法と基準についてはシラバスに明示し、学生に周知している(資料4(3)-5)。

成績評価は、科目の目的や授業形態に応じて効果的な評価方法が採られている。課題レポート、プレゼンテーション、受講態度等を考慮し総合的に行っている。「親鸞を歩く(京都フィールドワーク)」ではフィールドワークのレポートを課し、その内容について評価している。また、「実践仏教演習」等においては、仏教科研究室を活用し『歎異抄』をもとに授業テーマについて主体的な学習を進め、その理解度について学習姿勢を含めて評価している。「卒業研究」については入学時から履修指導や学習支援を指導教員・仏教科研究室・学科連携の下に行い、卒業時にその内容に対する評価と口述試問を経て単位を認定している。

【幼児教育保育科】

各科目における成績評価方法と基準についてはシラバスに明示し、学生に周知している(資料4(3)-5)。

成績評価は、科目の目的や授業形態に応じて効果的な評価方法が採られている。講義系の科目では、グループ討議や小発表における参加姿勢、小レポートの内容を成績評価の対象としているものもある。実技系の科目においては、実技試験における技能面での評価(実技試験を課さない科目もある)に加え、日々の練習の成果や授業への参加姿勢、発表会における歌唱、演技等を総合的に評価し、単位認定を行っている。実習科目については、「実習指導」への参加姿勢、実習園からの評価、実習簿等により総合的に評価を行っている。卒業時に提出する「卒業研究」については、主査と副査2名で審査し評価をしたうえで単位を認定している。そして、卒業研究発表会を行うとともに、要旨集「卒業研究」としてまとめ、幼児教育保育科の全学生と教員に配付している。

2、点検・評価

●基準4(3)の充足状況

教育方法については、教育目標の実現に向けた授業形態により授業を実施している。また、履修登録科目の上限設定を行い、学生の主体的な参加による学修が積み上げられるよう、学習指導の充実を図っている。授業はシラバスに基づいて実施し、成績評価の基準に則って評価及び単位認定は適切に行っている。シラバス記載内容と授業内容・方法の整合性を確かめる法則の確立と教育内容・方法の改善を図るための組織的研修・研究については、より一層充実を図っていく必要がある。以上により、本学の教育方法については、お

第4章 教育内容・方法・成果

(3) 教育方法

【大谷大学短期大学部】

おむね基準を充足している。

①効果が上がっている事項

(短期大学部研究室を拠点とした学習指導)

仏教科においては、仏教科研究室を拠点とした学習指導を行っている。学生は、卒業研究作成の際、主査の教員と副査の教員の双方と相談を重ね、指導を受ける。助教が常駐し、専門的な内容における疑問点等について適切に指導している。助教は学生との年齢も近く、授業時間外も質問や相談に応じており、学生は積極的に指導を受けている。この関わりを通して、学生の実態把握が可能となり、個々の学生に応じた支援ができるようになっている。また、自由に利用できるパソコンと関係書籍や参考資料等を配置し、研究環境を整えることにより、学生の居場所をつくっていることも学習に対する主体的な姿勢につながっている。

幼児教育保育科においては、幼児教育保育科研究室に主に幼児教育保育科を担当する事務職員2名が常時待機し、学習・研究の助言や相談に応じている。2名のうち1名は司書の有資格者で、もう1名は幼稚園教員の経験者と、幼児教育保育科研究室に適した配置となっている。授業時間外の学習スペース、またミーティングスペースとして学生の居場所となっており、主体的に学習に取り組む姿勢が見られるようになった。仏教科と同様、自由に利用できるパソコンと、関係書籍や参考資料等を配置し、研究環境を整えていることも学習に向かう姿勢をつくることにつながっている。

(フィールドワークを取り入れた授業)

仏教科では、「親鸞を歩く」「ブッダを歩く」のように、教室の学びにとどまらず、自分の目で見て肌で感じる体験型の授業を行っている。親鸞やブッダにゆかりのある土地を訪ねることにより、その生涯や教えについての学びを深めていくことができている。とりわけ、「ブッダを歩く」のインドフィールドワークにおいては、インドの大地に生きる人たちの生活と文化に触れる異文化体験を通し、豊かな人生観を養い、他者とともに生きる力を身につける貴重な学びになっている。

(実践的な学びができる参加型・体験型授業)

幼児教育保育科においては、第1学年の「実習指導」で保育者の仕事を知ることが目的とした園見学を実施している。実際の保育の場を通して実習へ向かう姿勢を見直すとともに、保育職へのモチベーションを高め、自己の今後の課題について考える機会となっている。また、第2学年の「保育・教職実践演習(幼)」では、幼児教育・保育における教育課程や保育課程の意義について再確認し、保育指導案や保育計画等の作成を行うことにより、現場において即戦力となれる実践力を身につけることにつなげている。また、「保育内容・総合表現」では、2年間の学びをふまえた総合的な表現活動として、舞台の企画・制作に取り組むことにより、技術面やチームワークを高めることができ、保育職に対する意欲の向上につながっている。

第4章 教育内容・方法・成果

(3) 教育方法

【大谷大学短期大学部】

(適切な履修指導の実施)

仏教科では、実践仏教演習Ⅰ・Ⅱ、人間ところろ演習Ⅰ・Ⅱ、幼児教育保育科では仏教保育演習において、少人数で指導を行っている。少人数なので担当教員と学生との結びつきは強く、教員は学生の実態把握に基づき、適切に履修指導、学習指導を行うことができている。

幼児教育保育科において取得可能な資格である、「幼稚園教諭 2 種免許」「保育士資格」に必要な実習（教育実習・保育実習）について、実習支援センターに常駐する事務職員が実習全般の支援を行っている。また、資格取得を希望する全ての学生について、必要な単位の修得状況や、履修状況を把握し、その指導や相談に応じることで、個々の学生に応じた適切な履修指導ができている。

②改善すべき事項

(シラバスと授業内容・方法の整合性の検証)

シラバスの内容に基づいた授業が展開されているかどうか、その取組状況については、学生に対する授業アンケートにおいて、「授業がシラバスに基づいて実施されたか」という質問項目が設けられており、アンケート結果は担当教員にフィードバックしている（資料4(3)-7）。しかし、シラバスの記載内容と実際に行われている授業内容の整合性については、客観的に把握する部署、把握する手段は確立していない。また、シラバスの記載内容が適正かどうかについても評価する仕組みができている。

3、将来に向けた発展方策

①効果が上がっている事項

(短期大学部研究室を拠点とした学習指導)

仏教科においては、今後も引き続き、仏教科研究室を拠点とした学習指導を行い、常駐する助教と学生が授業時間外にも積極的に関わることで、個々の学生に応じた指導を充実していく。自由に利用できるパソコンの配置と、関係書籍や参考資料等の配架を工夫し、研究環境を整え、学習に向かう学生の主体的な姿勢を一層育めるようにする。

幼児教育保育科においても、幼児教育保育科研究室における学びの一層の活性化を図る。幼児教育保育科研究室内の環境整備（図書配架の工夫、学生の作業のための文房具類の充実等）を一層充実することにより、日常的に学生の積極的な学びを促すようにする。また、今後も専属の事務職員が常時待機し、より積極的に学習・研究の助言や相談に応じることにより学習指導の充実を図るとともに、授業時間外の学習スペース、ミーティングスペースとして学生の居場所を確保し、落ち着いて学習に向えるようにする。

(フィールドワークを取り入れた授業)

仏教科においては、今後も体験により学ぶ機会を設け「親鸞を歩く」「ブツダを歩く」のように、教室の学びに留まらず、自分の目で見て肌で感じる体験型の授業を行っていく。とりわけ「ブツダを歩く」は、現在のところ3回開講しているが、これまでの経験を踏まえ、より充実した授業内容となるように検討する。

第4章 教育内容・方法・成果

(3) 教育方法

【大谷大学短期大学部】

(実践的な学びができる参加型・体験型授業)

幼児教育保育科では、第1学年の「実習指導」において、今後も園見学を継続し、学習意欲を高め、積極的に実習に臨む姿勢が持てるよう努める。そのために、見学を依頼する園との連携を深めるとともに、見学の在り方について学科での点検、評価を行う。また、第2学年の「保育・教職実践演習(幼)」では、教育実習の経験を踏まえ、保育指導案や保育計画の作成等、実践力を身につけられるよう担当者間の打ち合わせをより綿密にし、授業展開を工夫する。更に、「保育内容・総合表現」では、舞台の企画・制作等の取組を通して、学生の主体的な活動を促し、保育者としての実践力や意欲の向上が図れるよう学科の全教員で支援していく。

(適切な履修指導の実施)

仏教科では実践仏教演習Ⅰ・Ⅱ、人間とこころ演習Ⅰ・Ⅱ、幼児教育保育科では、仏教保育演習において、教員と学生との結びつきを深めながら、個々の学生の実態に応じた適切な履修指導と学習指導を行う。学科会議などで情報を共有して、一層効果的なものとする。

幼児教育保育科においては、「幼稚園教諭2種免許」「保育士資格」に必要な実習(教育実習・保育実習)について、実習支援センターに常駐する事務職員が実習全般の支援を行っていくが、その際、学科との連携を十分取るようにし、必要に応じて学科会議等で意見を述べてもらう機会をつくる。また、資格取得を希望する全ての学生について、必要な単位の修得状況や、履修状況を把握し、その指導や相談に応じることで、個々の学生に応じた支援を一層充実していく。

②改善すべき事項

(シラバスと授業内容・方法の整合性の検証)

教員が成績を教務課に提出する際に、シラバスどおりの授業を行ったかどうかの自己評価を同時に提出し、その報告内容を教育推進室が確認し、指導する仕組みをつくる。また、翌年度のシラバスが提出された際に、記載内容が適正さを保つために第三者が点検する仕組みを作る。

4、根拠資料

資料 4(3)-1 「大谷大学短期大学部学則」(既出(序-1))

資料 4(3)-2 本学 HP 「大谷大学短期大学部 短期大学士課程の教育方針」

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000003cn7u-att/nab3mq000003cosy.pdf>

資料 4(3)-3 『履修要項 2014』(既出(4(1)-4))

資料 4(3)-4 「大谷大学短期大学部履修規程」

資料 4(3)-5 『授業計画(シラバス) 2014』

資料 4(3)-6 「2014年度『授業計画(シラバス)』原稿の入力について」

資料 4(3)-7 「授業をよりよくするために『学生による授業評価アンケート』実施要項・調査票